

査定書

軍艦大角丸船神寶丸衝突事件ノ事實原
因及責任ヲ査定スルコト左ノ如シ
一 事實

軍艦大角丸ハ大正十四年四月十二日午後六時三
十分神戸港出港原速十節(回轉百七十回
轉)ノ速力ヲ以テ吳軍港ニ向ヒ同日午後八時
十分明石瀬戸ニ於テ江崎燈臺ヲ南二十九度
西二十米ニ見ル點ニテ針路ヲ北七十度西ヨリ南
七十五度西ニ變ヘタリ當時變針點ハ附近航
船ニ隻アリテ艦長海軍大佐山本土岐彦航
海長海軍大尉小野寺丑藏ハ比較的多大

海軍
臣

8-10 P.M.

3000'

N 70° W

五子舟
手前

顧慮ヲ之。押ハサル可カラサルヨリ、要針ヲ終リ定
 針スル迄ハ、今日、衝突航船等ニ就テ、別ニ知ル
 處ナカリキ。是針後航海長ハ直ニ當直待校
 海軍少佐清水義ニ當直待校トシテ、艦標
 縦ヲ引キ延キ、(再後衝突直前迄艦位測定
 等ニ從事)シ航船ニ就テハ、夫レ迄知悉セム
 リシカ、其ノ原艦長及當直待校ハ、右艦首
 約一點約三ノ米、及其ノ左方約艦首方向ニ
 航船、舷燈ト認定セル艦燈各一ヲ認メタリ。當
 時天候晴、靜穩、海上和風、向北西、風力。
 乃至一潮流方向約西南西(夫知艦長、當直
 待校ハ何點ト謂フ如キ正確ナル方向ハ知レサル
 モ、追潮ト考ヘタリ)潮流速力約三節(夫知

艦長の非常ニ強シト思ハサルモ相當ノ速力
 當直將校ハ微弱トキリ(タリ)晴天ノ暗夜ニシ
 テ視界約二十米(眼鏡ヲ用ヒ)ナリキ艦ハ普
 通航海ノ状態ニ在リ羅針針艦橋ニハ艦長當
 直將校ノ外航海長(艦位測定等)ノ海圖
 箱内ニ頭ヲ入レ居レリ(副直將校、候補生一
 測距手)一在橋シアリシリ
 當直將校ハ右舷船ヲ針路速力ニ就テ確
 シル判定ヲ得サリシモ別ニ問題トスヘキ程ノモ
 ニアラスト思ヒ其儘系進路ヲ保キ航進シ艦
 長亦別ニ注意ヲ集フル處ナカリキ之ヨリ量
 キ艦長ハ明石瀬ヲ入ル前ヨリ同瀬ニア
 ハ帆船モ帆船ナレト從來ノ経験ニ微ニ誤ル

要
 道

カ厄介ナリトノ願慮ヲ多ク有シタリシガ當
 時帆船ニ對スルト共ニ帆船ノ前方遠距離ニ
 アリシ汽船ニ對シテモ注意ヲ分ナツツアリ
 右帆船ノ事ニ當リ帆船ナルト稍明瞭トナリハ
 距離約二千米位トナリシ限ニシテ速力ニ極
 ノテ微弱ナリト認メシモ其ノ向首方向ニ航
 行ニ未タ判定シ得ザリタリ當時艦長ノ胸裡
 ニハ其ノ日遭遇セシ帆船ノ多クハ並航ノ反航
 船ナリシニ鑑ミ右方ニ見ユル帆船モ亦霧燈
 ラ見セザル程度ニテ並航ノ反航位ニ向首セルモ
 ノニシテ或ハ例ニ依リ航過シ得ルモノトノ想像
 往來シ居リ當直時校是此儘ニ直進セハ兩
 帆船ノ中間ヲ航過シ得ルモノト考ヘ存シ

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三

五ノ九
五ノ八

居リキリ

午後八時十七分頃右舷船ハ明瞭トナリ右方見
エシモノハ已カ前路ヲ右ヨリ左ニ横過スルモノ左方
ニ見エシモノモ亦同方向ニ航スルモノニシテ航ヲ上テ
居ルコトモ之ヲ認めルヲ得タリ此時測距儀ニ依
リ右方帆船ノ測距ヲ命ゼシモノ羅針盤橋
前箇中央ニアル硝子盤ニ妨ケラレ右障壁ノ
為測距シ得ス正確ノ距離ヲ知ル下能ハザリ
シカ帆船ノ位置ニ就テ當時艦長ハ右方前
船ハ矢矧ノ右舷艦首約一照約一ノ米、左
方ノモノハ略艦首ニテ右方帆船ヨリモ距離
稱遠シト見、當直情枝ハ右方帆船ハ矢矧ノ
右舷艦首約一照半約一ノ米、左方ノモノハ

五

五

左舷艦首約一點右方帆船ト距離略等シ
 ト見タリ因テ當直將校ハ帆船ノ推定針
 落ハ矢刻ト直交ナルモ其ノ東力微弱(四
 分ノ一節)多クトモ半節ヲ越ヘス)ナリト推定
 シ兩帆船ノ中間ヲ通過セハ安全ニ航過シ
 得ヘシト決心シ係針セシカ此時ニ留リ艦長ハ
 當直將校ニ對シテ危イ様ヲ告ガシテ退
 タ方が良ヒゾ(此言言葉ニ就テハ判然タル記憶
 ナキモ大体此意味及程度)ト注意セシヲ以テ
 當直將校ハ直ニ己カ左舷燈ヲ帆船ニ見
 ル如クスルヲ可ト認メ「面航」(基準航)南十
 五度)ヲ令セリ當直將校トシテハ距離相
 當ニアリ面航十五度ニテ充分得ルモノ

手前
手前

ト思ヒタリ然ルニ艦首の却テ精取舵ノ方ニ
回頭スルカ如何ノ認メタルニヨリ
ル意味アリシヲ以テ操舵員ノ抵テ舵ヲ取リツツ
アリ約八九度ノ面舵トナリシ時此令アリタリ
但羅針盤橋ニ舵角指示器ナキ高島道徳
校ニ當時ノ舵ノエ合ハ不明ナリ又操舵室ニ
舵角指示器アルモ不良(屢々工廠ニ對シ修
理方請求セシモ修理サレズ)ニシテ使用シ居ラ
ス從テ實際ノ舵角ニ就テハ果シテ如何ナリ
シヤ尙是下可能ナリ然レトモ在來ノ経験ニ
ヨリ舵角ノ復期ノ位置ニアリシト思ハレ道徳ニ
停止シテ面舵一杯ヲ令セリ此間約十秒
ナリシカト思ハレ續テテ右後進車速ヲ令セシ

何れも右舷標
を停止せしむ

至難

至難

カ回頭充分ナラサルニ距離著シクノ近接シニ三
 百米位ニ至リタリト見タレテ以テ「両機停止」
 「兩機後進」を命令シ（後進全速ノ積リナキヤ）
 「命令セシモ時機既ニ過キ午後八時三十分
 頃路江崎燈塔ヲ南七十一度東三十分
 米鹿ノ廢燈塔ヲ南八十一度西ニ見ル地點
 ニ於テ凡ソ五節以上ノ前進體積力ヲ以テ
 右方机船ノ後楯後方左舷側ニ交南約六
 十度機首ヲ以テ衝突シ之ヲ兩斷押シ散リ
 如キ形トナリ然ニ破砕流失セシムルニ至リタリ
 航泊日誌機閉日誌ニ依ル衝突前ノ主機械
 發停ノ状況ハ左ノ如シ

午後八時十七分「右機停止」發令

同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同
						八時十九分	八時十八分
						「右舷機停止」發令	「右舷機停止」發令
						「右舷機後進原速」發令	「右舷機後進原速」發令
						「右舷機停止」發令	「右舷機停止」發令
						「右舷機後進原速」發令	「右舷機後進原速」發令
						「右舷機後進原速」發令	「右舷機後進原速」發令
						「右舷機後進原速」發令	「右舷機後進原速」發令

衝突前衝突船附近ノ状況ハ同船ノ右前方約五百米ニ一隻以前ヨリ認メ居リシカ（後方約一千五百米ニ一隻ノ帆船同船ト同方向ニ航シツツアリタリ）
 當時離橋シハ羅針離橋ノ左舷側ニ偏シタル位置ノ一米半距離儀ヲ準備シテアリ談判距離儀

ノ準備ハ完全ナリト認メラルルモ平素ノ操
習並ニ測距儀ノ教ノ關係上其ノ他ニ測距儀
ノ備ナカリヤ

衝突前迄州船ノ對シ汽笛ヲ鳴ラセ等特ニ注
意ヲ喚起スヘク所為ハ矢矧トシテハ別ニ取リ
居ラヌ

矢矧船輪ハ平素ヨリ稍重キ氣味アリ當
日モ目標ナリシカ特ニ操舵上ノ支障ハナキモ操
舵速度ニ幾分影響有ル處アリシモト認メラ
ル船取機械ノ蒸氣弁開度ハ四分一ニシテ
平素ト異ル處ナシ

當日衝突州船ハ午前九時播州坂越ヲ出港
シ神戸方面ニ向ヒシカ午後七時三十分頃ヨリ風

カ微弱トナリ且ツ午後八時頃ヨリ逆潮トナリ
 シラ以テ淡路ノ海岸ニ待機ノ目的ヲ以テ總舵ヲ
 上ケル儘船員四名ノ内一名ハ操舵シ残り船
 員三名ハ檣邊シ初ノ江崎燈塔ニ向首セシ後
 サレ莫ノ右方ニ向首四分一乃至半節位速
 カニテ前進シツツアリシカ最初其ノ左舷前方
 ニ白燈二個及緑燈一個ヲ認メタルヲ以テ之レ
 汽船ナルヘシト思ヒ居リシニ其ノ逆接スルニ
 ヒ喇叭ノ音響五秒後八時十五分ハ巡横用意
 ノモトト思ハルヲ聞キ軍艦ナル事ヲ承知シ
 自己トシテハ航速速カシモキマツ故無痛轉
 舵シテハ却テ悪シト想ヒ依然前方向ニ船首
 ヲ保テツツ全員大聲ヲ擧ギテ悪ヒツ悪ヒソト下

五

五

呼び危急ヲ報シ尚木片ヲ以テ船側ヲ敲打シ
 タリレカ其ノ内紅燈ヲモ見ルニ至リ闇モテ衝
 突セラルルニ至リタルモノナリ
 矢刻・於テ右警報ヲ聞クニハ所船ヲ距ルル
 ソニ百米以内ナリキ所船衝突破砕スルヤ
 船体ノ大部ハ矢刻左舷側ニ沿ヒテ流失シ
 橋及所ノ一部ハ船側ニ懸リシヲ以テ矢刻
 ニ收容スル全船員四ノ名ハ一旦海中ニ入リシモ
 前續帆艇(新吉丸)ノ救助船ニテ救助セラレタ
 リ衝突スルヤ矢刻ニ於テハ直ニ左舷救助艇ヲ
 下シ救助ニ從事セシムルト同時ニ探照燈ノ
 點燈ヲ令シ約五分ノ後後部探照燈一臺
 先ツ照明ヲ初メ續クテ全燈點燈セヨク引キ

洋 員

續々右船救助船ヲ下シ尚流矢物拾收ノ爲
 更ニ「カッター」ニ隻ヲモ下シ作業ニ當ラシメタ
 リ然レニ船員四名ハ全部先ツ前續州船新
 吉丸ノ救助船ニ救助セラレタルヲ以テ其ノ内ニ名
 ハ新吉丸ニ便乗岸和田ニ向ハレナ船主中村
 傳治及船長澤田万作(負傷シアリ)ハ矢刻
 移シ拾收物件(前掲櫓及帆ノ一部、外柳
 行李一個)ト共ニ吳ニ向フトトシ午後十一時
 頃 廣衛突地點ヲ發航セリ
 廣衛突州船々為其ノ地左ノ如シ
 船名 神寶丸(木造西洋型帆船)登簿噸數七十
 (噸)

國籍 日本

原 三

所有主氏名 中村傳治 (山口縣吉敷郡井

原村字所知領三百十五番屋敷)

船長氏名 澤田万作 (同右百十六番屋

敷)

船員 二名

衝突・火の損害左ノ如シ

矢矧 損害ナシ

神簀丸 破砕流失・積荷石炭及船員八名

賊道具・大筒七失・船長負傷

二 原因

矢矧

(1) 面舵ニ回避シタル下

(理由) 若シ面舵ニ回避セザリシナラハ神簀丸

- 凡トノ衝突ハ起ラザリシモト推定シ得直
進又ハ取舵回避ニ依リ他ノ船舶等ト生ル
関係ハ別問題ナリ
- (四) 回避最初ノ舵角トナリレポート
(理由) 最初ヨリ大舵角ヲ用ヒハ或ハ避ケ得
タルヤモ知レスト思ハル
- (三) 回避中ノ前進速力大ナリレポート
(理由) 最初ヨリ後進ノ速力又ハ全速ヲ
用ヒナハ避ケ得ヘク肯望アリ
- (二) 回避回頭ノ時機遅レタルレポート
(理由) ト今カレク早目ニ回避回頭セハ衝
突セザリレハ明ナリ
- (一) 距離測定ニ誤測アリレポート

(理由) 艦長當直時被其回避(初頭神
 寶丸迄ノ距離ヲ約一十米ト目測シ居レ
 リ若シ一十米ノ距離アリトセハ特別ノ事
 情イキ限リ彼ノ場合回避可能ト認メラル
 然ルニハ由那ニ謂フ旋回圈縦距ノ更伸
 ノ外特別ノ事情アリト認メ難シ而
 モハ由那ノ事情ハ之ヲ特別事情トシ
 テモフルニハ影響即言聊カ小ナリト認メラ
 ル而テ若シ距離ハ百米以内ナラハ衝突ノ
 機ハ會アリト思ハルルヲ以テ目測距離ニ
 誤測アリシモノト断定セサルヲ得ス
 ハ回避スヘク最初「面脱」シテ「面脱」トモ
 左ニ回頭ノ氣味アリ為ニ旋回圈ノ縦距ヲ

大ナラシメレポート

(理由) 當時約三節ノ追潮ヲ右舷艦尾
約ニ點ニ受テ居リシモト思ハレルハ自然
舵ノ据リ方悪シカリレポートノ想像セラレル處
ニシテ、面舵レ令アリシトキハ偶々艦首左ニ
回頭、氣味アリ操舵員ハ之カ修正ノ為面
舵ノ抵舵ヲ操リ約八九度ニ至リタル時ナ
リシカ如シサレハ舵ノキキ方悪ルヲ自然旋
回圈ノ縦距ヲ大ナラシムルニ至リタルト推
定シ得但具体的数量ノ推定ハ不可能
ナルモ非常ニ大ナルモ、ニアラザリシモノト認
ム

ハ) 回避回頭ノ際潮流ノ為旋回圈ノ縦距ヲ

要
旨

大ナラシメテ下

(理由) 當時時約三時、追潮ヲ右舷艦尾約二點ニ受テ居リシモ、ト思ハレ、ト自
然、回頭、回頭之際、之カ影、響ヲ受テ、静
水ノ場合、旋回、距離ヨリモ、大ナルモヤル
如キ結果ヲ生セシモノト認ム

神寶丸

行船ニヨル、船機、回避、所置、多ク、不
ナリシト

(理由) 衝突約五分前、軍艦ナルコトヲ認
メテヨリ、以後、警告、急喚起、キ、改メ、多ク、ノ
力ヲ用ヒ、多ク、ノ操船、キ、ヲ、弛、ノ、爲、ニ、行
船ニヨル、船機、回避、ニ、盡、ス、ト、薄、カリ、シ、モ、ノ

西院
見
ト

一
手
持
入
手
割
席

ト認ナラシ
責任

矢野

の原因のニ對シ

責任ナシ

(理由) 神寶丸道、距離事實一十米
アリトモハ方位、如何ニ關セス而航ニ依ル
ノ回避運動ニテ回避可能ト認ナラシ
以テ當時艦長當直侍校共距離一十
米ヲ信シ同意シ又ハ行ヒタル結果ナレハ
咎ム可キ點ナシ

原因のニ對シ

艦長、當直侍校、觀ニ過クタル多クリノ

毎
重

永
小

手
解

速
力

責
ア
リ

(理由) 距離一十米方位右舷首一
 以ハニ神寶丸アリトモハ面航十五度ニテ
 モ若ク同遊可能ナラシト認メラルラ
 以テ此點然ルル下能ハス然レトモ夜間
 目測距離、確度不モトカナルニ鑑ミ相
 當大事ヲ執リ餘裕アル運用法ヲ用
 ヲルヲ適當ト認メラルルニ付ラス其ノ所置ニ
 出テサリシ當直特校、之ヲ是認セシ艦長
 ハ多クノ稟觀ニ過キタルモノト認ム

川 原田四ニ對シ

責任ナシ

(理由) 艦長 當直特校 共神寶丸迄ノ

近江
近江

距離が一十米アリト信シ回轉運動ヲ
行ヒシレド故初メヨリ後進ヲ用エテ意志
ヲ生セガリレハ自然ノ力置ニシテ必可キ
點ナレ

三) 原因の對シ

艦長目測距離過信、爲果觀望ニ過キタル
多かり、責アリ、當直將校責任ナレ

(理由) 艦長、神費丸迄、目測距離一千
ニ三百米ニテハ未タ船体ノ模様判明セス今
カレシク前進タルニ差支ナキヲ以テ出來得
ヘクハ船、向首方向等ヲ認メテ所置セン
ト考ヘ約一十米附近ニ至リタルトモ眼鏡
ニヨリ薄ク帆船ノ船体ヲ認メタルヲ以テ回

証
証

距離測

避つて送迎レタルモノニシテ目測距離深測ノ
 責任ハ免ケル中モ時機ヲ適レタルニ對シテハ
 責任ナシ然レトモ同様夜間目測
 距離ノ深測ヲ願ヒ早目ニ所置セザ
 リレハ多クハ果觀ニ過キタリト認ム
 當道時機ハ當時神寶丸ト其ノ前續
 折返トノ中間ヲ航過セントスル意志ノ下ニ
 偏針セシテ以テ回避回頭ノ時機ヲ選擇シ
 全然艦長ニアリテ當道時機ニハ何等責
 任ナシ
 (ホ) 原因由ニ對シ
 艦長 距離測是ヲ誤リタル過失ノ責任ナ
 リ

當直將校距離測定ヲ誤リタル過失ノ責

任アリ

尚艦長當直將校及航海長ニ對シ本衝突
事件直接ノ責任トハ認メ難キモ測距
儀校正備不足ニ関シ遺憾ノ點アリ

(理由) 艦長ニ神寶丸迄ノ距離一ノ十米ノ
原測距儀ニ依リ之カ測距ヲ命ジタルモ障
碍ノ為測距シ得ス止ムヲ得ス目測距離
ヲ用ユルニ至リタルモノニシテ事情同情スル
キ點ナキニアラサルモ本衝突ノ主因ハ距離
測定ノ誤リニアリト認メラルル處ニシテ其
ノ誤測ノ過失ニ對シテハ責任ヲ有スルモノ
ト認ム

海軍

當直時被ノ距離測定ヲ誤リタル過失ノ
 責任ハ艦長ト同様ナリ然レトモ當時當
 直時被ノ神寶丸迄ノ距離約二十米所
 近ヨリ厚々司船紅燈ノ方位ヲ測定シツ
 ヲアリ誤方位ハ漸次聞セツアルヲ居
 リレ關係上多ク距離測定ニ力ヲ用セザ
 リレトテ止ムヲ得サルコト思ハレ加之回避
 頭ハ突如艦長ノ意思ニ従フ為ニ行ヒタ
 ルモノナレハ此點艦長ト同一ニ考フルコト
 能ハス艦長ニ比シ責任輕シト認ナラ
 ル
 夫別羅針艦橋一米半測距儀ハ架臺
 位置ト艦橋前面中央ニアル硝子幕ト

関係ニテ夜間測距上或死南ヲ生スルハ
 霧ヲ承知シアルニ拘ラス之カ改造ノ修理請
 求ヲナシタル事 宜マモ認メラレヌ又今回
 ノ如キ潮流並船物ニ對シ願慮多ク水
 道ノ夜間通過ニ際シ燈標補造ノ手
 段ヲモ講シタルコトナキハ行船保身止測
 距儀使用ヲ解リニ輕視シタル候アリトス
 元ヨリ測距儀使用ヲ重視セハトキ衝突
 等ノ事故ヲ防止シ得ヘシトハ謂ヒ難キニ
 正確ナル距離ノ測定ニヨリ避ケ得ヘキ機
 會多クハ否定スルコト能ハズ現ニ今回ノ如
 キ正確ナル距離ニシテ隨時長尺スル
 如ク測定ナシタルコトモハ或ハ本衝突ノ避

左
力
ノ

得たりト思考セラルル事ナキニアラス元
 測距儀ノ整備不足ヲ以テ衝突ノ
 原因ナリトハ謂ヒ難キモ遺憾ノ點アリシ
 ト認め然レトモ矢矧、右ノ從來ヨリ
 羅針儀一尺半測距儀ノ外行船
 用トシテ曾テ他ノ測距儀ヲ備ヘタル事
 ナク且ツ船長以下矢矧、乗船後航海
 上ノ経験ナリナク行船止諸種ノ準備
 未タ研究時代トモ稱スヘレハ本國ノ
 測距儀整備不足ニ對シ深ク責ムルコ
 トハ遺憾ト認め
 原因ハニ對シ
 責任ナシ

洋
眞

内法為他
の由大

(理由) 當時ノ状況上有り得ヘキアトニシテ

編々工台悪ク遭過シタルモノニシテ羅針

盤橋ニ舵角指示器ナキ以上艦長が當

直特救艦板ノ状況ニ應シテ操舵命

令ヲ通シ當ニスルコトハ何人ヲ以テスルモ能ハ

サル處ナリ又羅針ノ状況ニヨリ回頭ノ氣

味ニ元ヨリ知悉シ得サルアラサルモ前方

所船ニ多大ノ注意意ヲ向ケサル可カラサル状

況ニアリシ當時ノ場合之亦止ムヲ得サルモ

ノニシテ責任ヲ問フ可キモノナシ

(1) 原因由ニ對シ

責任ナシ

(理由) 神寶丸近ノ距離一十米アリ

術
 上ノ責任
 ト
 此
 入

?

トモハ假令潮流ノ影射有アルモ同遊可
 能ナラト認ナラレルヲ以テ雖長高當時
 様共致無難アリト見テ同遊ニシタル以上
 且ツ潮流ノ影射有ニ就テハ多クノ後期ニシテ
 以上由ラ可ク責任ナシ

神童也行指上左記ノ通り不充分ノ點アリト
 認ナラレルヲ以テ本衝突ノ責任ヲ全部夫期ノ
 不當行為ニ歸スルハ身當ナラザル點アリト認ム

左記

外 第四外ニ對シ

神童也被衝突位置ニ影射ニ連ナリ
 外ニ所ナレハ神童也ニシテ若シ全カク
 學ヲテテ操運ヲ續ケタリトモハナリトモ無敬ノ

右査定ス

右査定ス

大正十四年五月二日

軍艦大尉前神寶丸新突事件本島問
人

二女員長海軍少将 官村 健造

二女員海軍大佐 白 健造

二女員海軍法務官 潮見 天樹

軍 見

編接位ニテ免レ得スヤモ知レズト思ハル然ルニ

其ノ所置ニ出テサリシニ海機回遊ノ方法ヲ誤

リタルモノニシテ斷突回遊ニ對シ盡スモ知充

分ナラサリシモノアリレト認ム然レトモ

ガ數船員ヲ以テムル連カナキ所船ノフトトテ

事情大ニ察ナクモノアルハ認ムル所也

陳述録取書

海軍共済組合呉病院

職員

三戸敬登

右、軍艦大角帆舩神寶丸衝突事件查
問會ニ於テ任事見左、通リ陳述セリ

一、當院ニ入院加療中、羅田万作ノ

叛名ニホリテエツキス光線ニカケテ見タ後

テナイト申シ兼、ホスカ皮膚腐爛ニ空気が

カ達入リテ居リ夫レカラウヤヒ気ヲ引レシテ

ニ居ル所、如キモノカ破テ居ル、テハナイ

カト思ヒユスホホメテ御却、痛ミ強キ者



キツギス光家ニモカケラレナイテアリ
ユスロ、今ノ度テハ助膜ハ確カニ被レテ
居ルト云フ事ハ判カリテ居リヌカ
助骨迄折レテ居ルカモウカト云フコトハ
判カリヌカ又

三

外部ニハ何等ノ劇モ見出ラス也
病状ハ何カニ壓迫サレテナラヌモ
思ヒユス又打診シテ見ユスリニ元来
此處体ト認ナラレ肺ニ病スル病氣ナ
トハ毎カツクモト認メユス只平素
カラ血氣病ノ様テアリユス

三、

全治日數モエツキスヤ光陰ニカケタ後イ
ナイト克クハ判カリユセマカニ週間モレタ
ナラ大夫夫ト思ヒユス

右録取ス

大正十四年四月十七日

海軍共済組台口病院ニ於テ

軍艦矢矧帆舩神寶丸 衝突事件

査問會

委員長海軍少将 宮村 登造

A large rectangular area containing a very faint table with approximately 12 vertical columns. The content within the table is illegible due to low contrast and fading.

陳述録取書

山口縣吉敷郡井原村字所知須

三百十六番地

神寶丸姫長

明徳四年十月十日
羅田万作

右ノ軍艦大羽帆船神寶丸衛兵事件
査問人會。於下は是を在通リ陳述セリ

一 本月十二日ハ所ノ船神寶丸ヲ豫備州
坂越ヨリ神三ノ所ヨリ積リテ飛鳥四
名ノ上島中ノ江崎燈台ヨリカ
カワリテ越ミテ居リ。コレヲ初ノ一

風テアツタ方流レリ都合セヨカッタリテ
 アリマスハ衝突ルニ三四十ハス前カラ
 風モ弱クナツタニテ燈カハカニ客のツテ
 親レ方ハ船ヲ採リ三人カ橋ヲ漕クテ
 二船リマシヨカ其ノ内ニ吉慶モ暗クナツテ
 来コシテ故行ヲ燈レテ進ラぬトツテ
 ランプ大シカ船カニ見入具ノ内ニ又哨ハ
 一船カ向テ来コシテ是ハ軍艦
 タト田心モ悪ク事ハナシト思フテ是カ
 几箇ナシニ衝突シテテアリマス別カ
 見張員ハ二船リマシヨカテシテ

本明

二

最初軍艦ヲ見タリハ燈台一哩位ノ處
 テレタカラ私ノ船トノ距離ハ二哩位ノ處
 テアツタト思ヒユス夫レモ初メハ軍艦
 トハ知ラス本船ノ前方左舷ニ掃把
 一個ト紅燈一個ヲ見タリテアリマス
 軍艦ト知リユスト共ニ是ハ大變ナ事
 ニオシタト思ヒユレタカ私ノ方テ矢鱈ニ船
 ヲ探リテハ悪イト思ヒ別ニ船ヲ探リカハ
 テハ居リユセ又當時帆ハ葉キテ居リ
 ムレタカ風ハアル様ニモアリ無イ様ニモ
 アルト云フ程度デアリマシタ

三

四

私ハ衛突ヲ免レヌト思フヤ直ク重要
書類丈ケナリト所来ガスマイトノ考
ヘカウ船室ニ入りカケヌレタカ又直ク早
ヤ取リ出ス間ニイ室ニ這リ身カ花
イト思フイ夫レヲ断念レテ由達ヒイ
居ル内ドセントカ言カレタト思フト共ニ
乗員四人共海中ニ投ヘテムレ一且
ハ沈ミヌレタカ又直ク浮キ出カリ流レ
テ居ル枝光レニ懸リテ居ルヲ新吉
丸ト云フ帆船ノ傳馬ニ投ヘラレタテ
アリヌス落リヌレタハ私ハ船ノメンス

1668

五

ストノ艦位テアリヌシタカ對キ艦ノ艦
 船ト衝突シタモト思ヒヌス怪我シレタ
 ノハ私一人テアリヌス重要書類ト云
 フリハ艦主カ未タ艦ヲ買ハレテ向エナ
 事テソレニ關スル書類テアリヌス
 當時附近ニ在ツタ艦トシテハ前述ノ
 新吉丸カ本艦ノ前方右舷約半
 哩ノ處ニアリ其ノ他遙カニ奥後ヨリサ
 シ左舷ニ當リテ一ニ隻ノ帆艦モ見タ
 ノテアリヌス是モ共ニ神戶ニ向フ艦テ
 アリヌシタ

1669

六、 昔時潮ハ神ニテリ方カラジト押シ

テ来テ居タ位ト思ヒマス

七、 積ム何トシユレテハ一松等ノ食糧ノ外ハ

石炭ノミテアリマシメ其ノ量ハ克ク

判カリユセヌカ一函ノ百ヤ外入リノ

モノカニ百五十函洋テアツタト思ヒマ

ス

八、 神寶丸ハ金銀薄板數七一噸長サ

五十一ニ三尺ノモノテ底ハカサリテモ上ハ非

常ノ廣クハ水一丈位ノ木造西洋型

帆艇テアリマシタリ松々来タ飛艇テ

尚モナリ事ニ船價其地ノフトル知リマ
セ又船主ノ私ト同村ノ中村傳治トモフ
人ナアリヌス

私ハ兩種運転士ノ免状ヲ持ツテ居リ
ヌス

右録取ス

大正十四年四月十七日

海軍共済組合吳病院ニ於テ

軍艦大分丸船神薙丸衝突事件

査問人會

本會會長海軍少將宮村曆造

1672

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>